

食育に関する意識調査の概要

1 調査の目的

市民の食育に対する意識や食習慣等の実態を調査し、「第3次宇都宮市食育推進計画」（平成29年度から令和3年度までの5年間）の評価及び「（仮称）第4次宇都宮市食育推進計画」（令和4年度から令和8年度までの5年間）を策定するための基礎資料とする。

2 調査設計

(1) 調査地域 宇都宮市全域

・調査対象者

一般（成人） : 5,000 人

中学生・高校生 : 3,023 人

幼児・小学生の保護者 : 2,496 人

(2) 調査方法

一般（成人） : 郵送による配布・回収

中学生・高校生 : 学校を通じた配布・回収

幼児・小学生の保護者 : 保育園・幼稚園・認定こども園・学校を通じた配布・回収

(3) 調査時期 令和2年10月

3 回収結果

	配布数	回収数	有効回収数	無効回収数	有効回収率
一 般	5,000	2,830	2,828	2	56.6%
中 学 生 ・ 高 校 生	3,023	2,855	2,840	15	93.9%
幼 児 ・ 小 学 生 (保 護 者)	2,496	2,241	2,338	3	93.7%

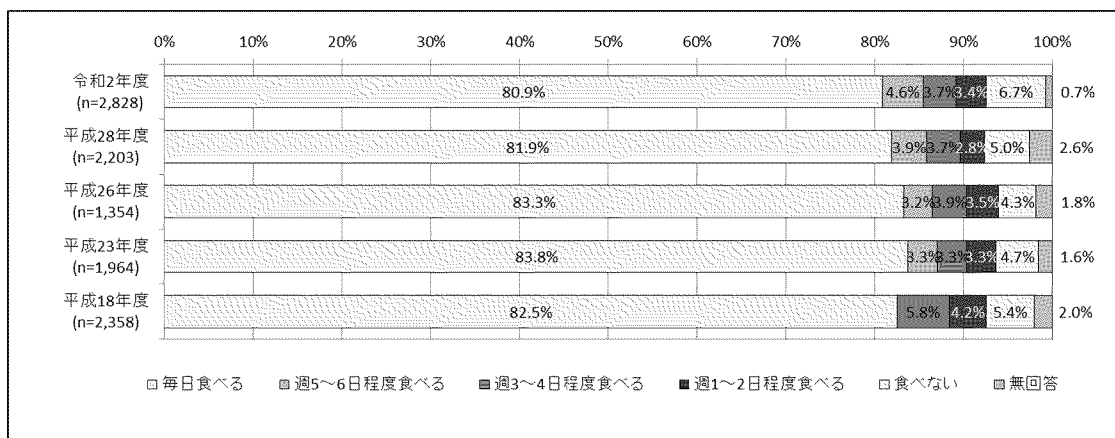
食育に関する意識調査の結果について

【基本目標 1】身体のことを考え、食事のバランスなどを心がけて食べます。

基本施策 1 子どもの頃からの健全な食生活の推進

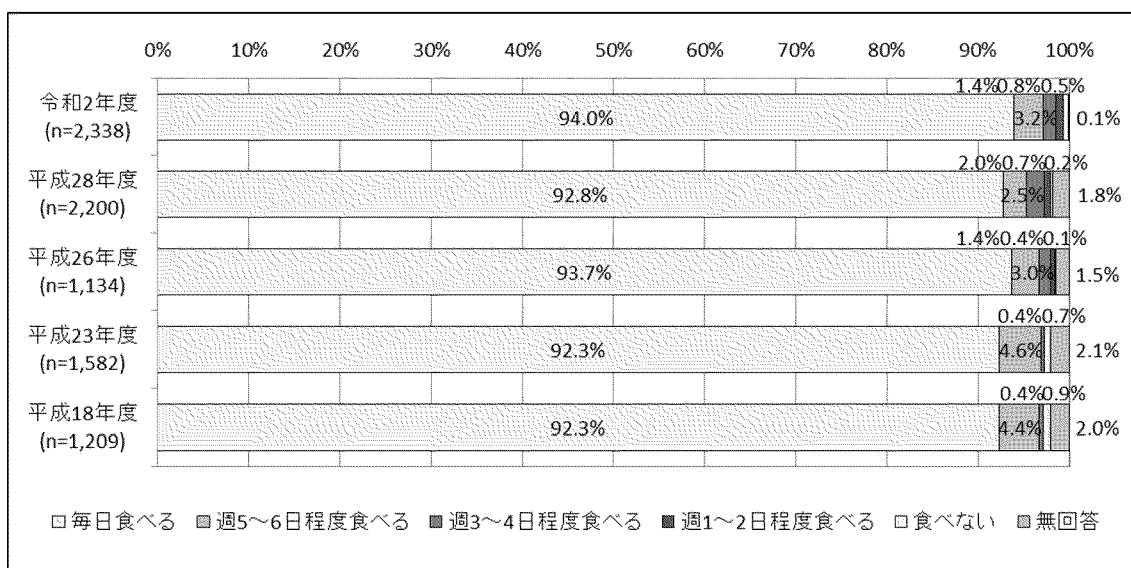
1 朝食摂取度

(1) 全体



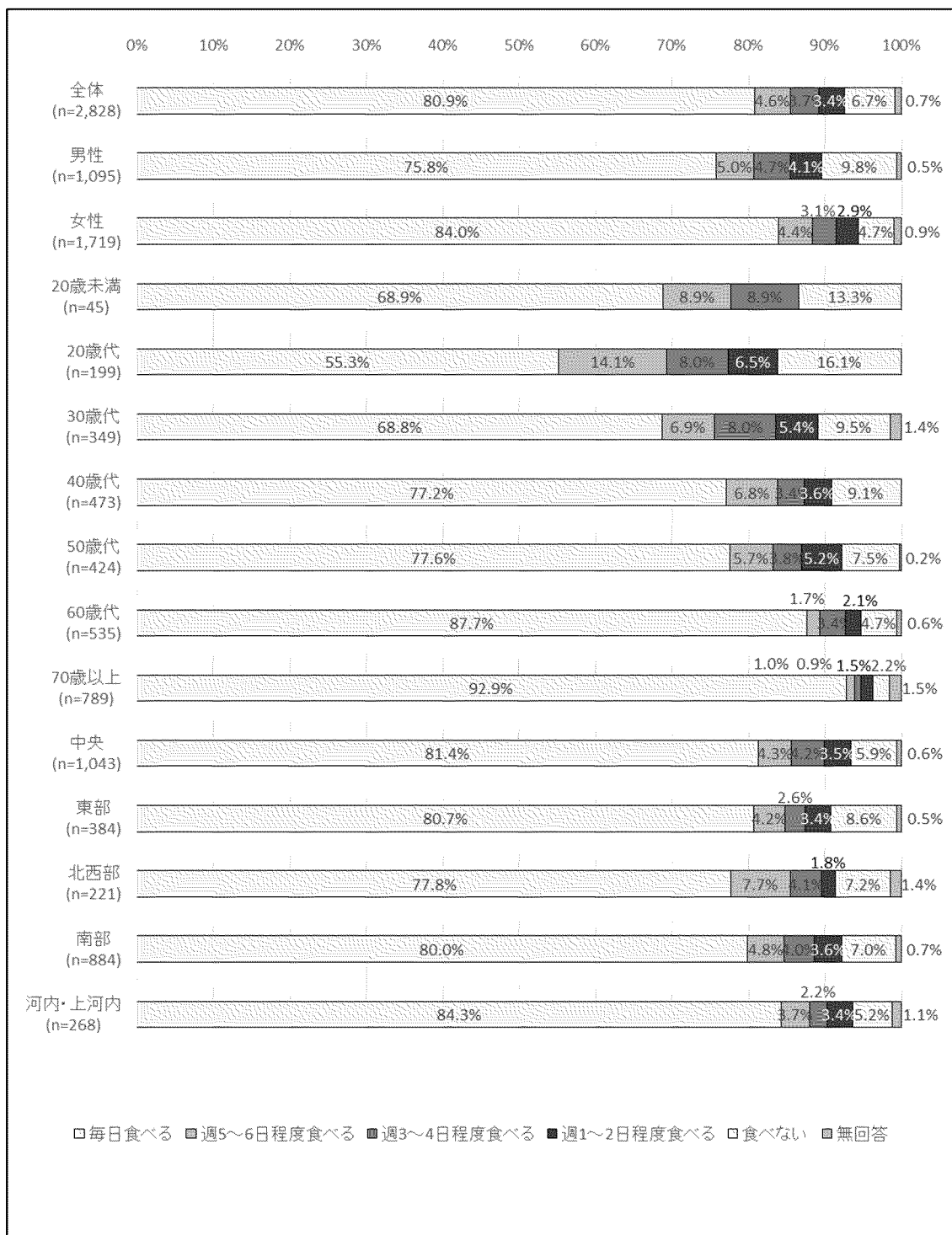
- ・ 「毎日食べる」が80.9%を占める。過去の調査結果と比較すると、平成23年度以降減少している。

(2) 幼児・小学生



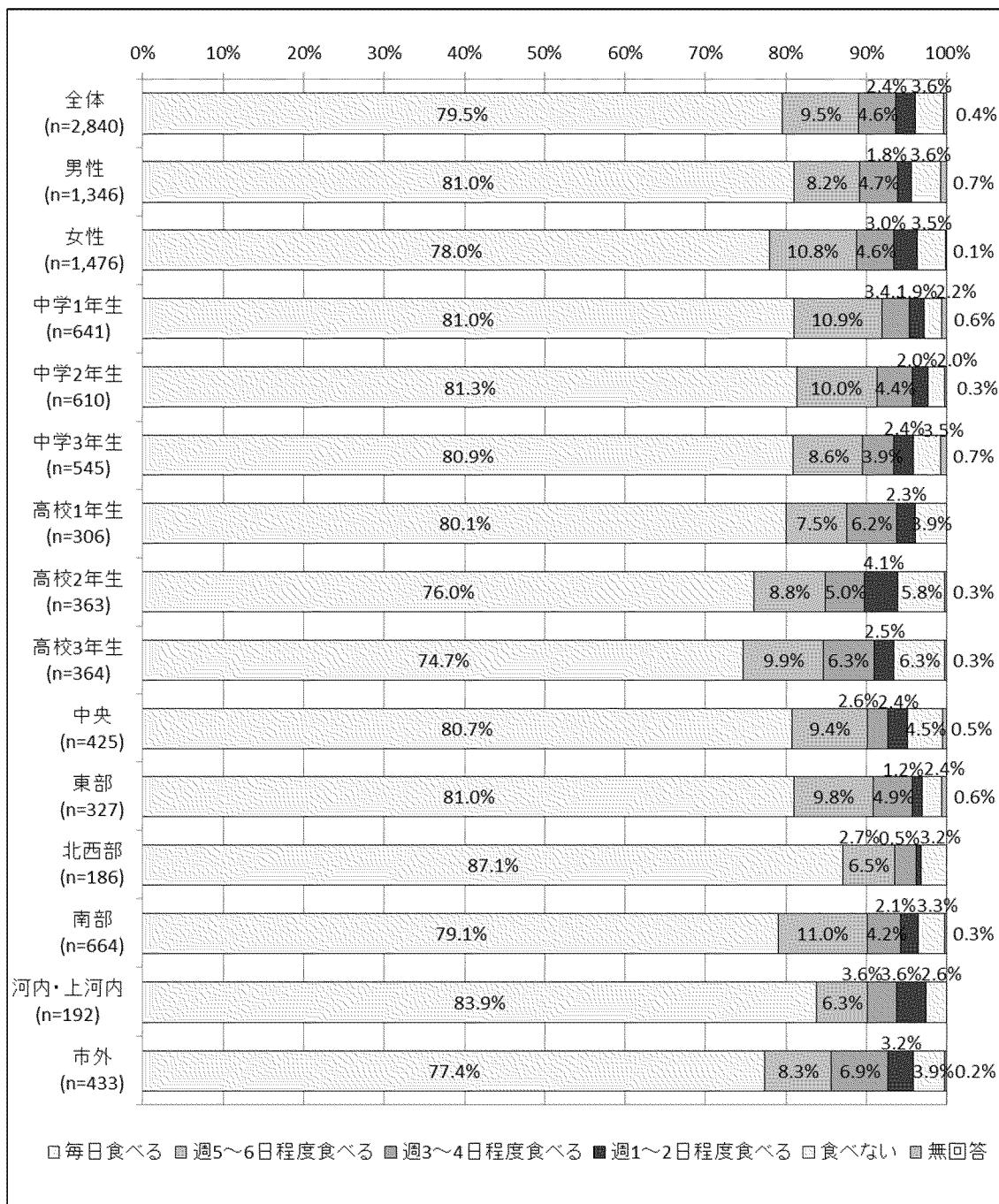
- ・ 「毎日食べる」が94.0%であり、他の回答は全て5%未満となっている。過去の調査との比較では、大きな変化は見られない。

(3) 年代別・地区別



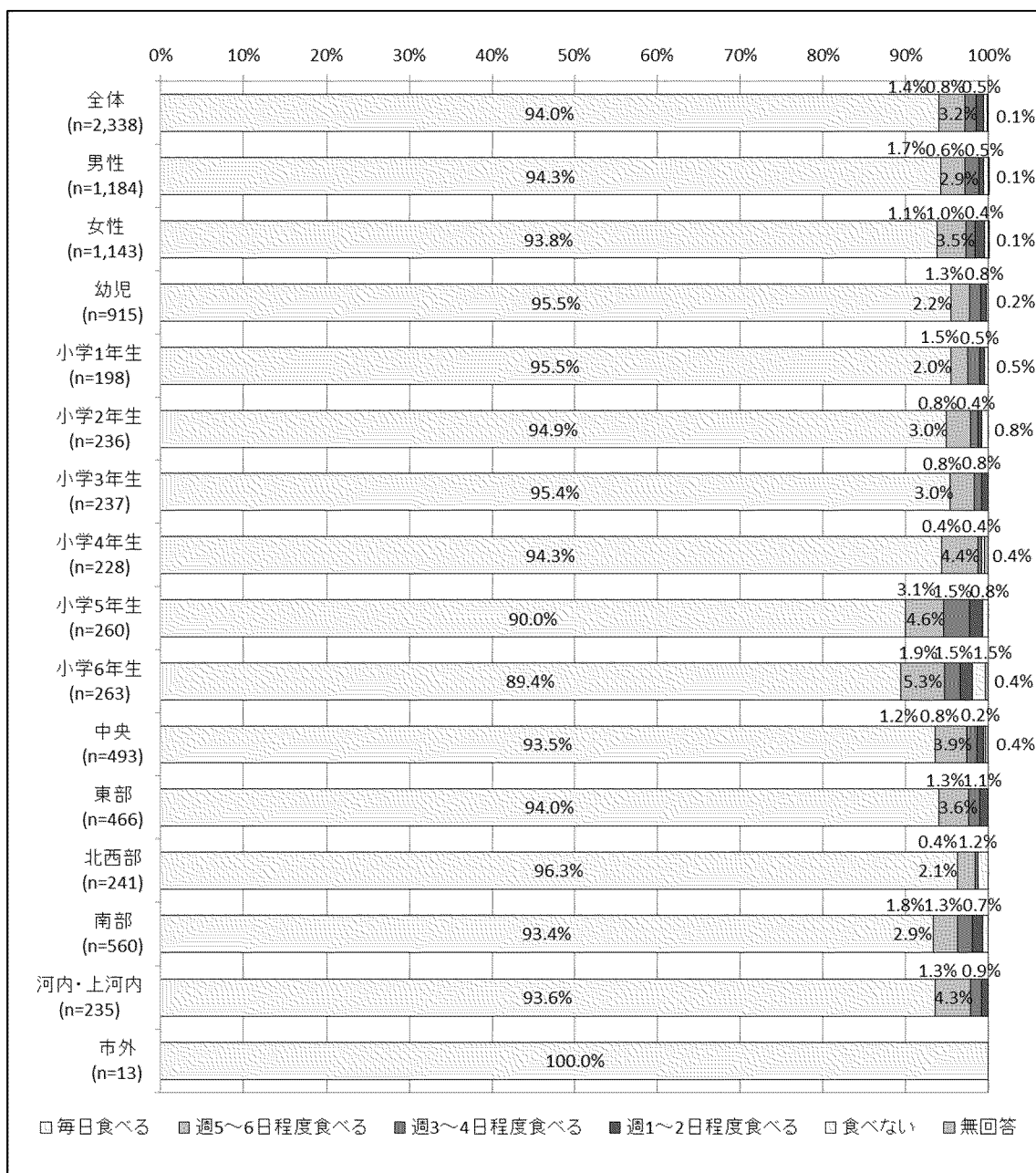
- ・ 性別では、男性の「毎日食べる」の比率が女性より8.2%低くなっている。年齢別で大きな差が見られ、年齢が高くなるほど「毎日食べる」の比率が高くなっている。最も低いのは20歳代の55.3%であり、最も高いのは70歳以上の92.9%である。

(4) 中学・高校生（学年別・地区別）



- ・ 性別では大きな差は見られない。学年別で「毎日食べる」の比率が高いのは中学1年生の81.0%、中学2年生の81.3%で、学年が高くなるほど比率が低くなっている。

(5) 幼児・小学生（学年別・地区別）



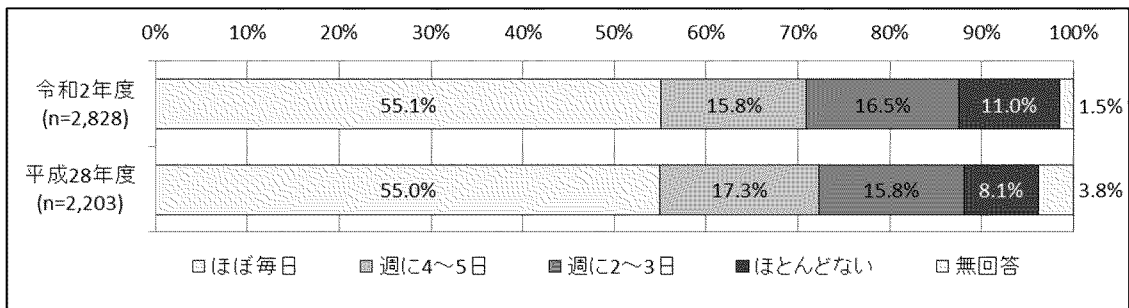
- ・ 性別では大きな差は見られない。学年別では学年が上がるほど「毎日食べる」の比率が低くなり、小学6年生では89.4%となっている。

基本施策 2 生活習慣病の予防や改善に向けた食育の推進

2 主食・主菜・副菜（※）をそろえた食事の頻度

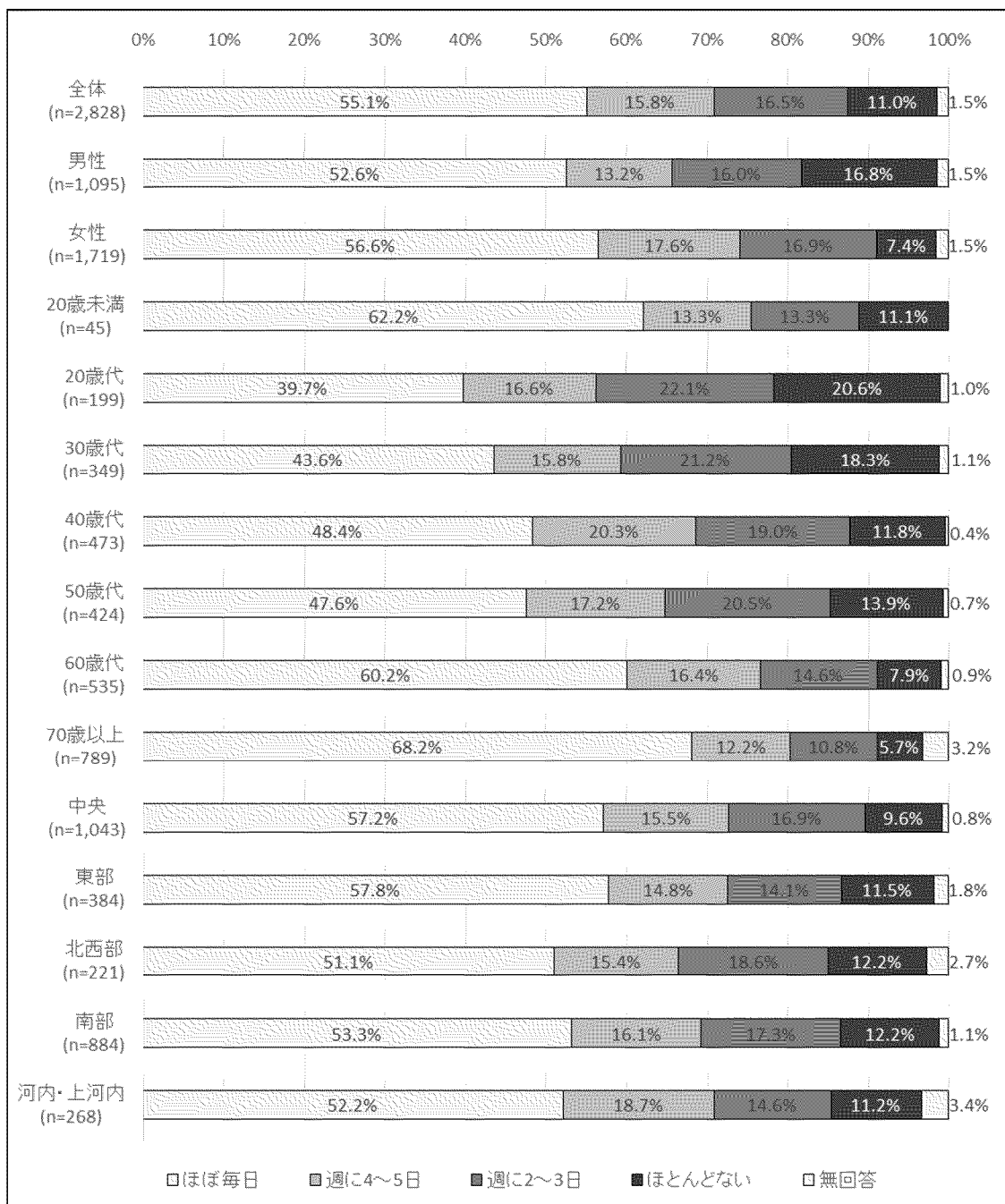
※ 主食とは、ごはん・パン・めん類などの穀類でエネルギー源となるものなど、主菜とは、肉・魚・卵・大豆製品などを使ったメインの料理など、副菜とは、野菜・きのこ・いも・海藻などを使った小鉢・小皿の料理など

(1) 全体



- ・ 「ほぼ毎日」が55.1%と最も高い比率を示し、「週に2~3日」が16.5%、「週に4~5日」が15.8%と続いている。平成28年度と比べると、「ほぼ毎日」は大きな変化はないが、「ほとんどない」が2.9ポイント増加している。

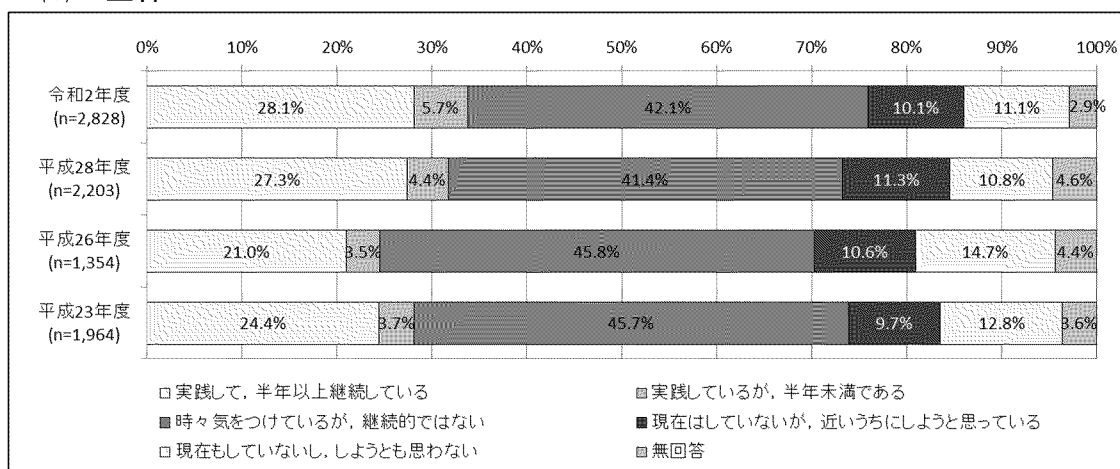
(2) 年代別・地域別



- ・ 性別では、「女性の「ほぼ毎日」が男性に比べると4%高い。年齢別では、年齢が高いほど「ほぼ毎日」との回答率が高い傾向が見られるが、20歳未満においても62.2%と高くなっている。

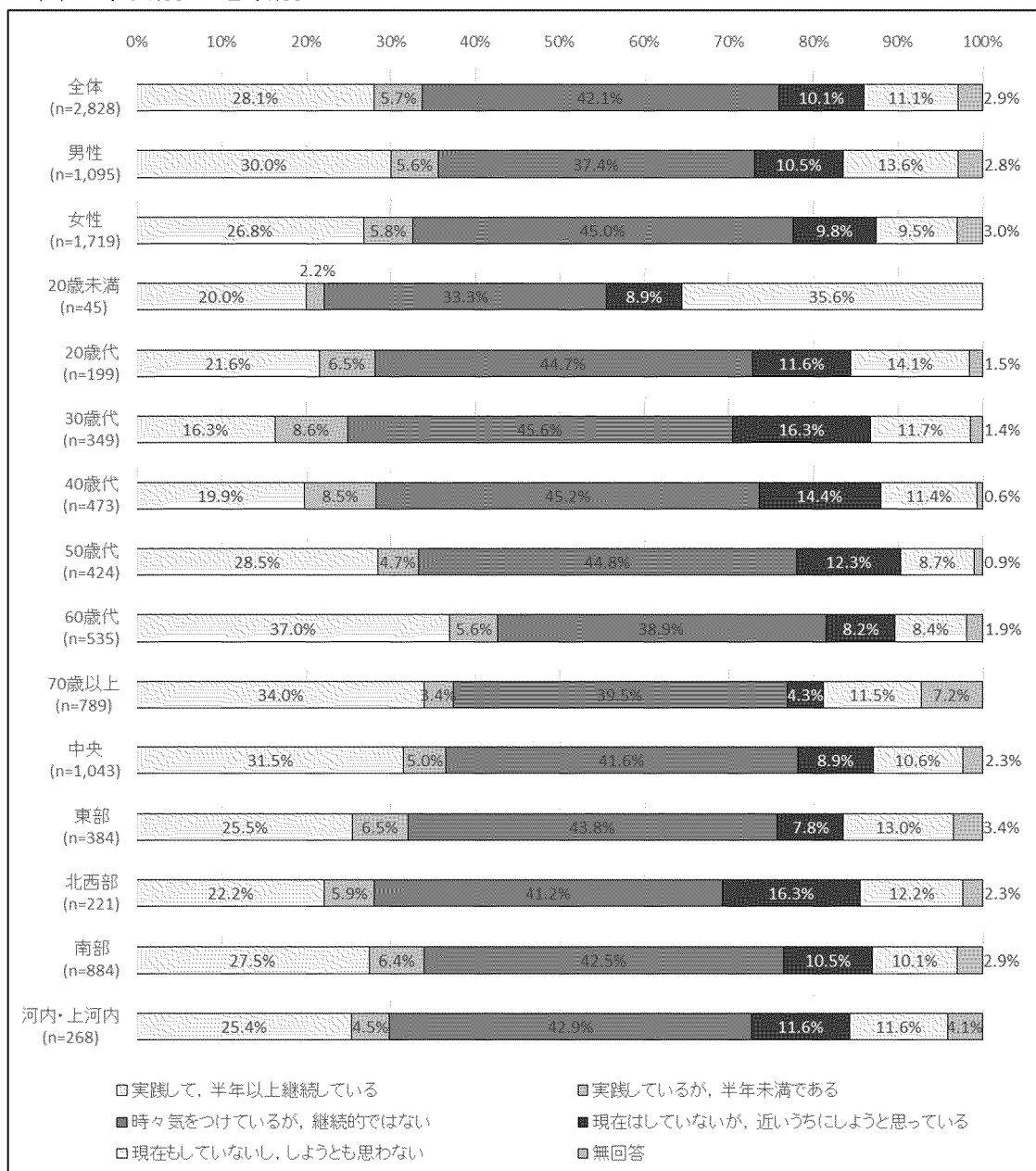
3 メタボリックシンドロームの予防や改善のための取り組みの継続的实践

(1) 全体



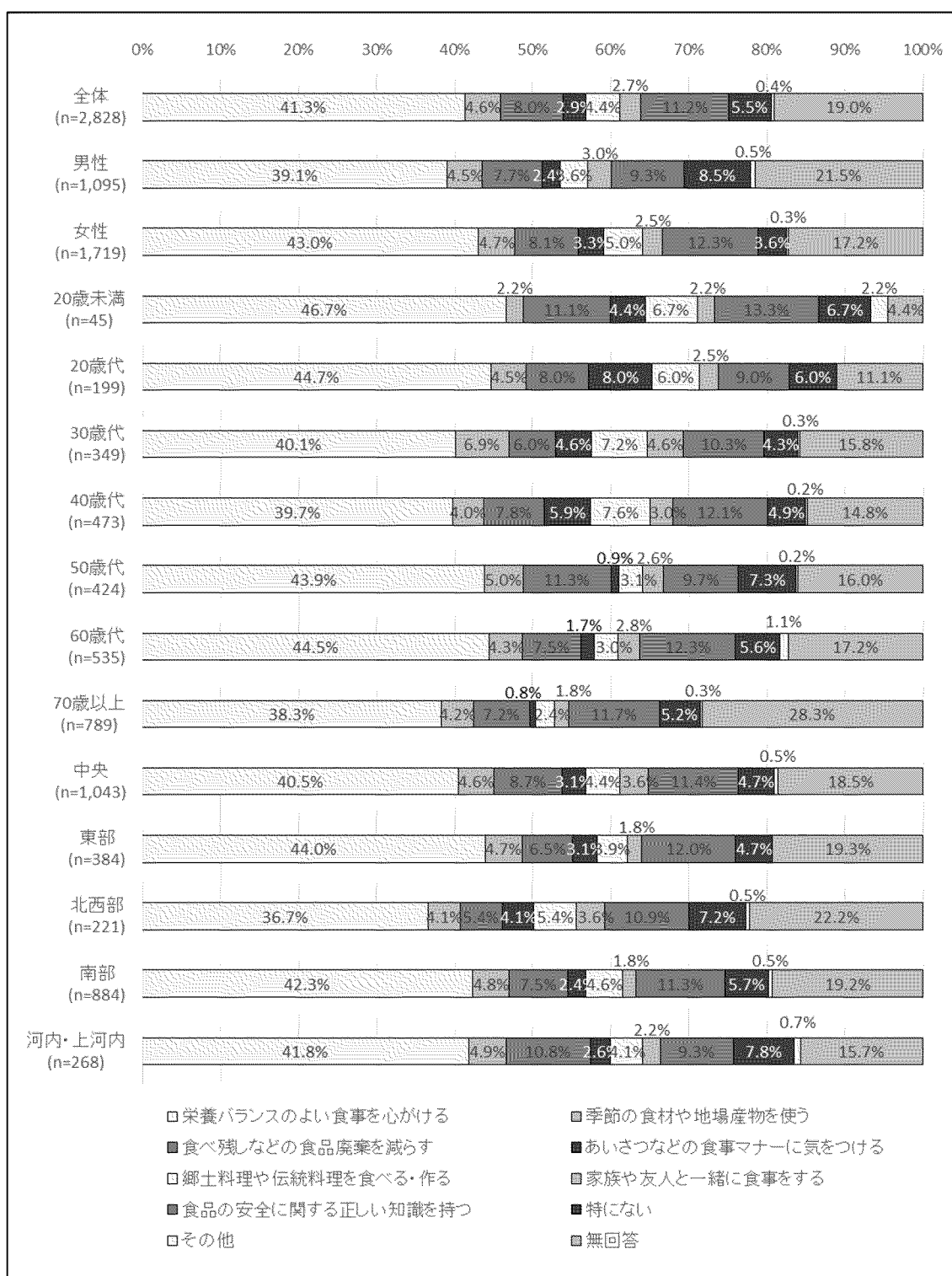
- ・ 「時々気をつけているが、継続的ではない」が42.1%と最も高い比率を示し、「実践して、半年以上継続している」が28.1%と続く。平成28年度と比べると、「時々気をつけているが、継続的ではない」と「実践して、半年以上継続している」のそれぞれについて、やや増加している。

(2) 年代別・地域別



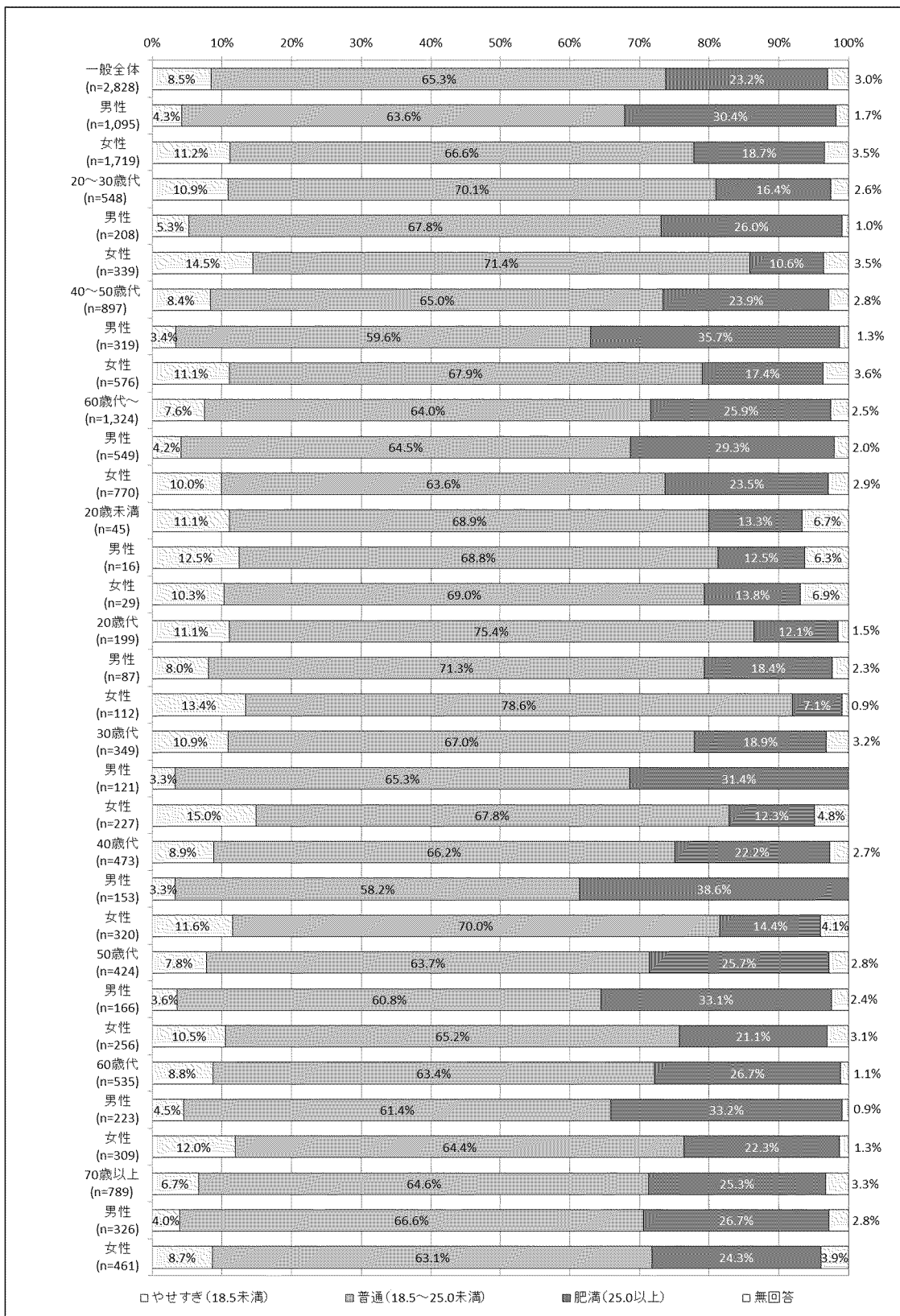
- ・ 性別で見ると、「実践して、半年以上継続している」の比率は男性が女性より3.2%高く30.0%、「時々気をつけているが、継続的ではない」の比率は女性が男性より7.6%高く45.0%。年齢別では、年齢が高いほど「実践して、半年以上継続している」の比率が高い傾向が見られ、60歳代では37.0%である。

4 これから最も力を入れて取り組みたい食育の取り組み



- ・ 「栄養バランスのよい食事を心がける」について、20歳未満が46.7%と最も高く、70歳以上で38.3%と最も低くなっている。

5 属性別BMI

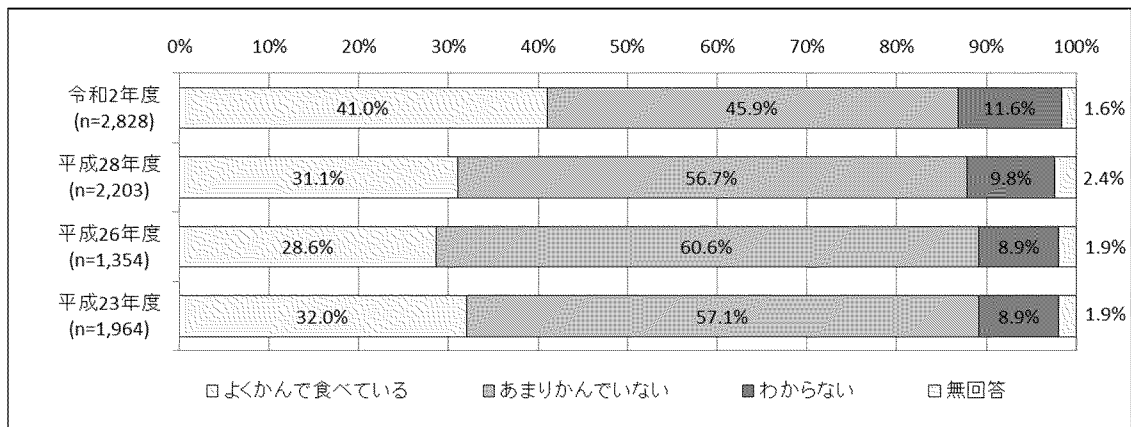


- 性別では、男性は「肥満」の比率が高く、女性は「やせすぎ」の比率が高い。

基本施策3 歯と口の健康づくりの推進

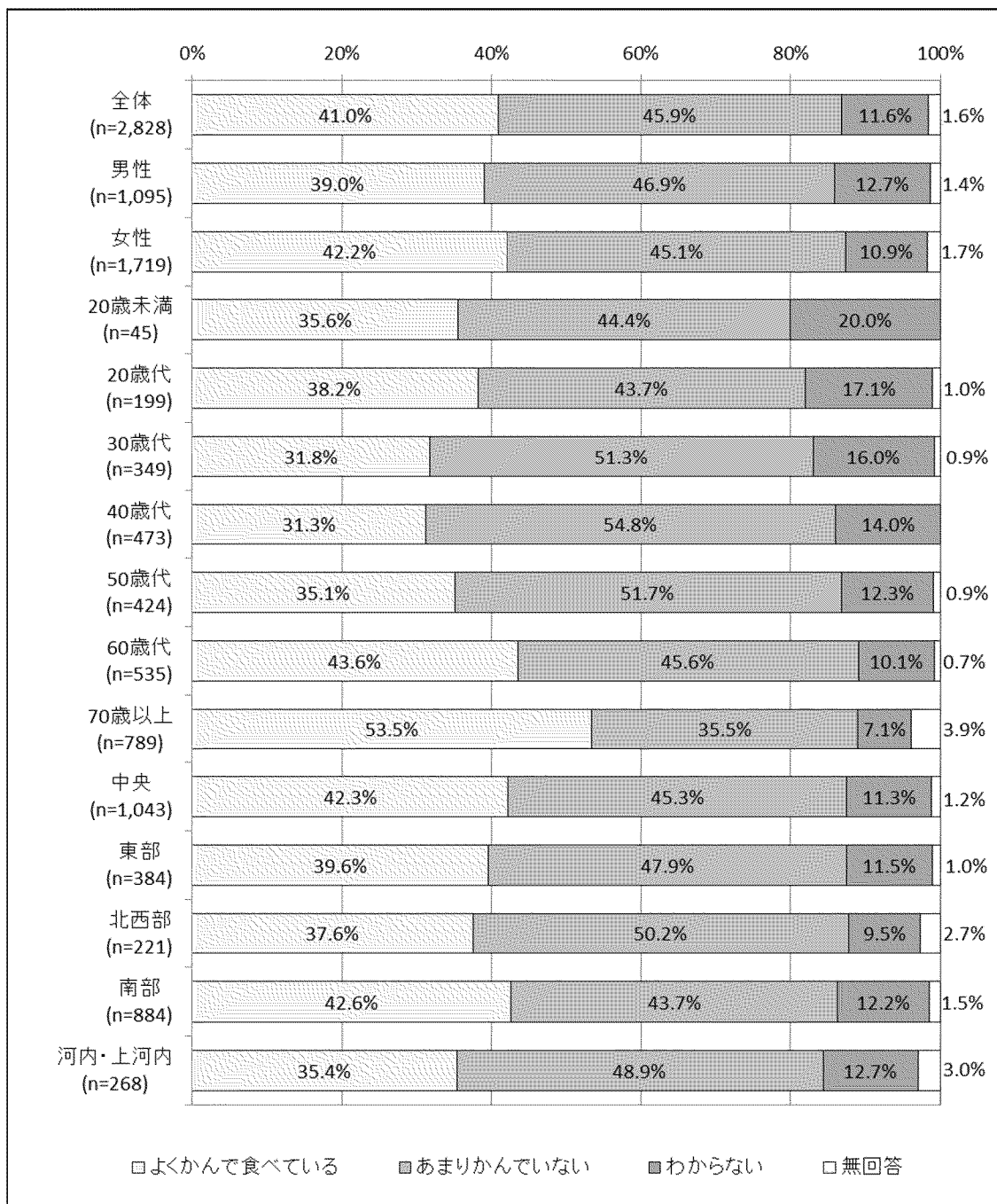
6 ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合

(1) 全体



- ・ ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合は、平成28年の調査までは30%前後で推移していたが、令和2年度は41.0%に増加している。

(2) 全体（年代別・地域別）



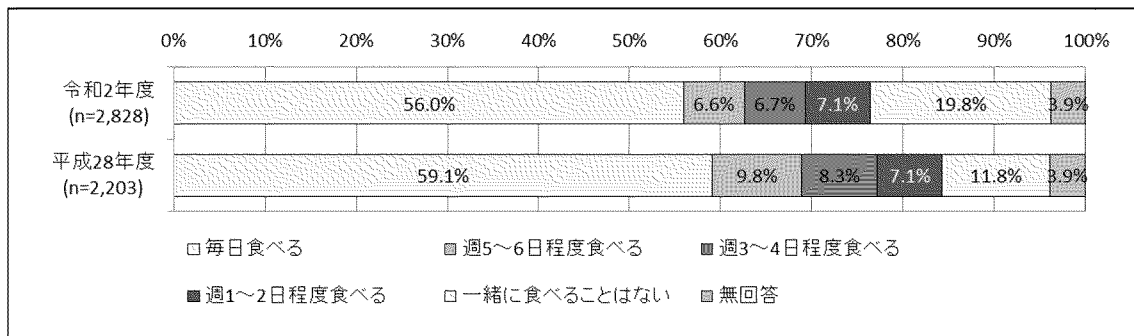
- ・ ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合は、女性が42.2%と男性より3.2%高い。年齢別では、ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合は30歳代が31.8%、40歳代が31.3%だが、60歳代では43.6%、70歳以上では53.5%となっている。

【基本目標2】家庭だけでなく地域や職場で食を支え、楽しく食べます。

基本施策4 家庭における食育の推進

7 朝食または夕食を家族と一緒に食べる頻度

(1) 全体



- ・ 朝食または夕食を家族と一緒に食べる割合は、「毎日食べる」が56.0%となっているが、平成28年度と比べると「毎日食べる」、「週に5～6日程度」、「週に3～4日程度」のいずれも減少している。

(2) 朝食または夕食を家族と一緒に食べる日数（令和2年度）

区分	回答数(a)	係数(b)	日数(a*b)	日数計(c)	平均日数(c/a)
毎日食べる	9,786	7日	68,502日	78,931日	6.02日
5～6日/週	1,115	5.5日	6132.5日		
3～4日/週	892	3.5日	3,122日		
1～2日/週	783	1.5日	1,174.5日		
食べない	537	0日	0日		
小計	13,113		78,931日	78,931日	6.02日
無回答	71				
合計	13,184				

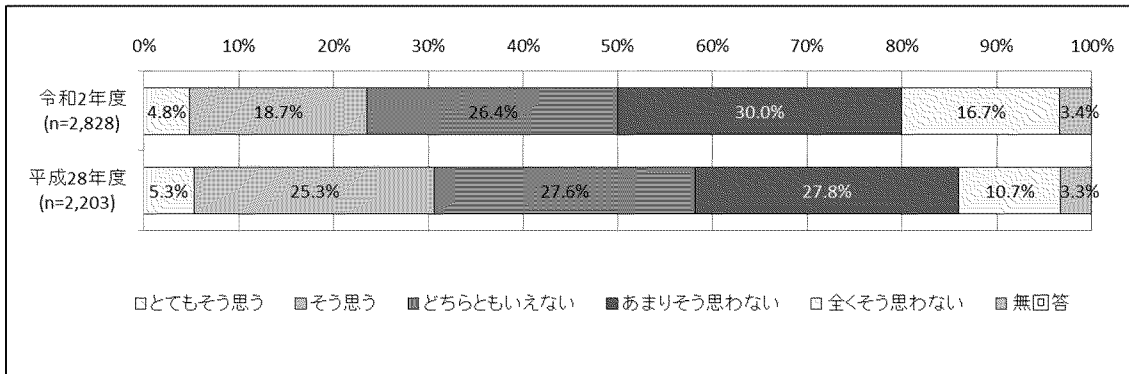
※ 中学・高校生、幼児・小学生は朝食、夕食を合算

※ 1週間あたりの日数については、「毎日食べる」を週7日、「週に5～6日程度」を5.5日、「週に3～4日程度」を3.5日、「週に1～2日程度」を1.5日、「一緒に食べることはない」を0日として、当該人数を掛け、合計したものを全体数で割って算出

基本施策5 地域や職場における食育の推進

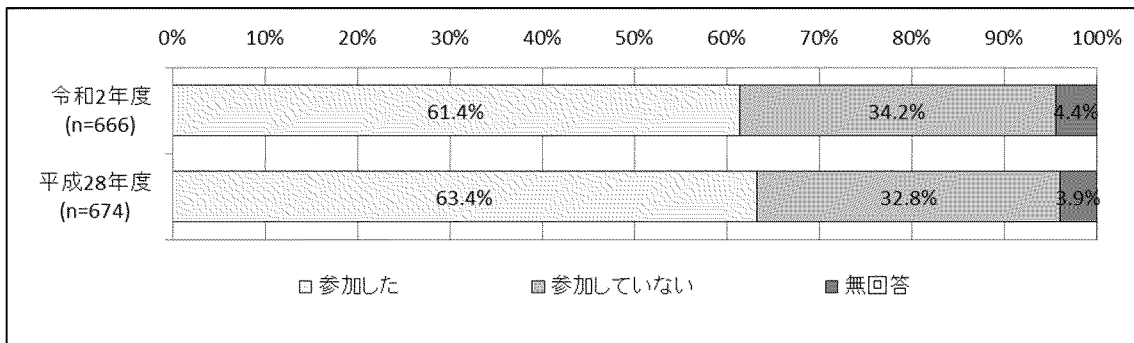
8 地域や所属コミュニティでの食事会

(1) 地域や所属コミュニティでの食事会の参加の意向



- ・ 「そう思う」（「とてもそう思う」と「そう思う」の合計）が23.5%で、「そう思わない」（「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」の合計）の46.7%を下回り、平成28年度と比べても「そう思う」の割合が減少している。

(2) 地域や所属コミュニティでの食事会へ参加経験

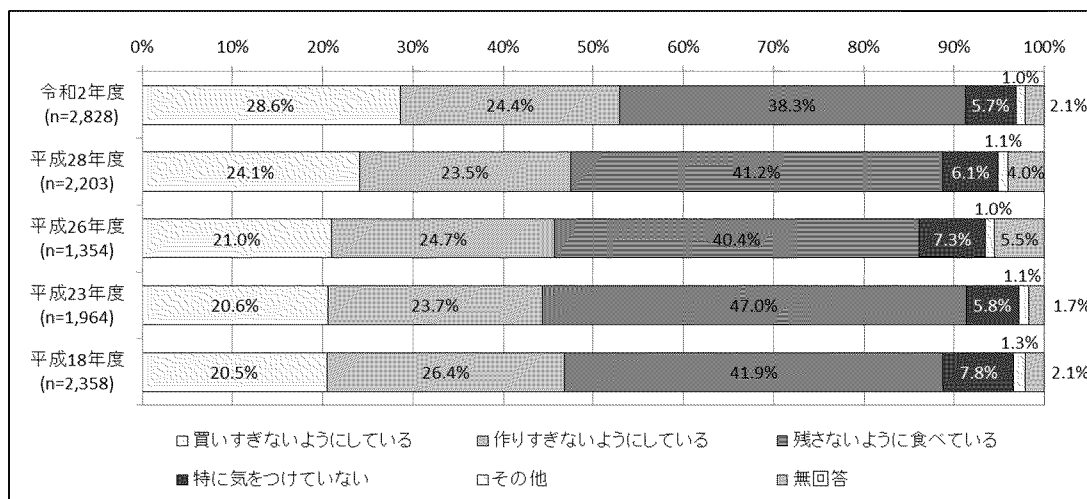


- ・ 「参加した」が61.4%となっているが、平成28年度と比べると2ポイント減少している。

【基本目標3】食への関心や感謝の気持ちを持ち、地元でとれたものを無駄なくおいしく食べます。

基本施策6 食の循環や環境への理解の促進

9 食べ残しや食品の廃棄について最も気をつけていること

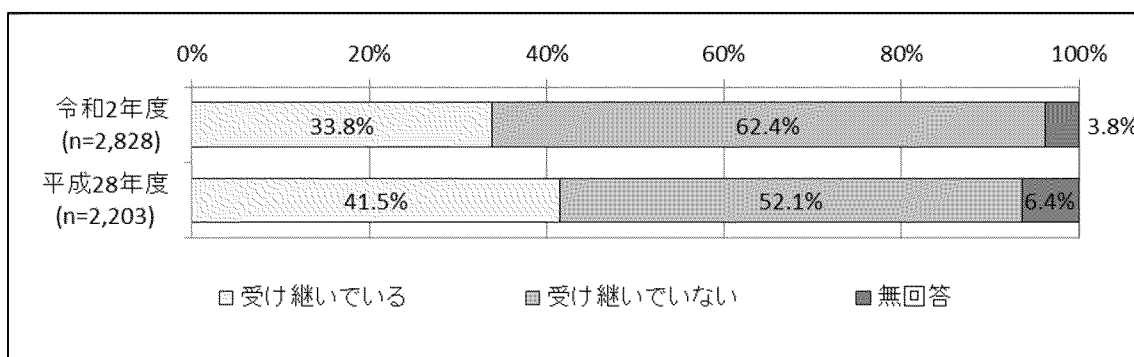


- 「残さないように食べている」が38.3%を占め、「買いすぎないようにしている」が28.6%、「作りすぎないようにしている」が24.4%と続く。平成28年度と比べると、「残さないように食べている」は2.9ポイント減少しているが、「買いすぎないようにしている」が4.5ポイント、「作りすぎないようにしている」が0.9ポイント増加している。

基本施策7 食文化の継承

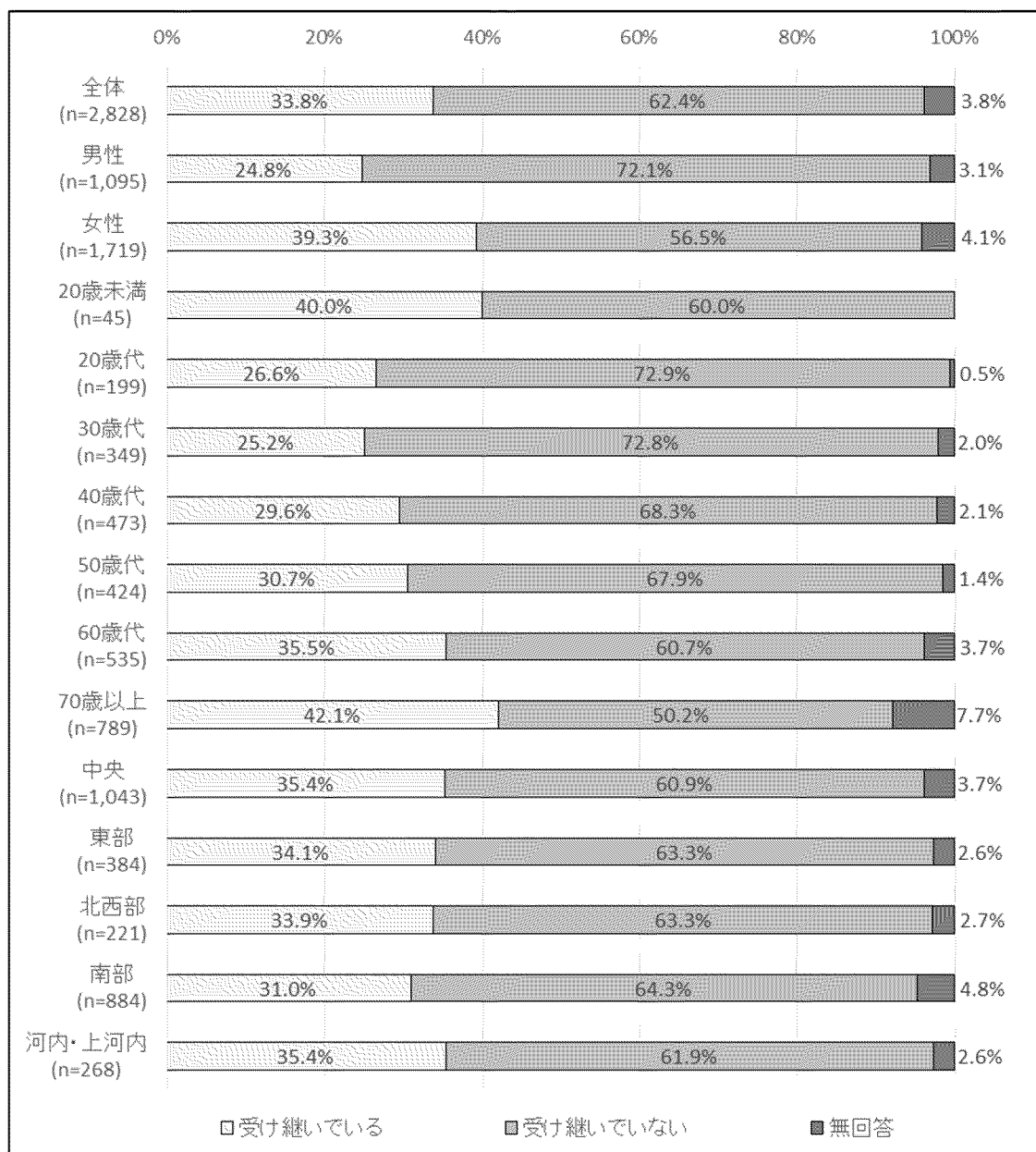
10 地域や家庭で受け継がれた料理や味、食べ方、作法の継承などの食べ方、作法を受け継いでいる人の割合

(1) 全体



- 「受け継いでいない」が62.4%で、「受け継いでいる」の33.8%を上回っている。「受け継いでいる」は平成28年度と比べ、7.7ポイント減少している。

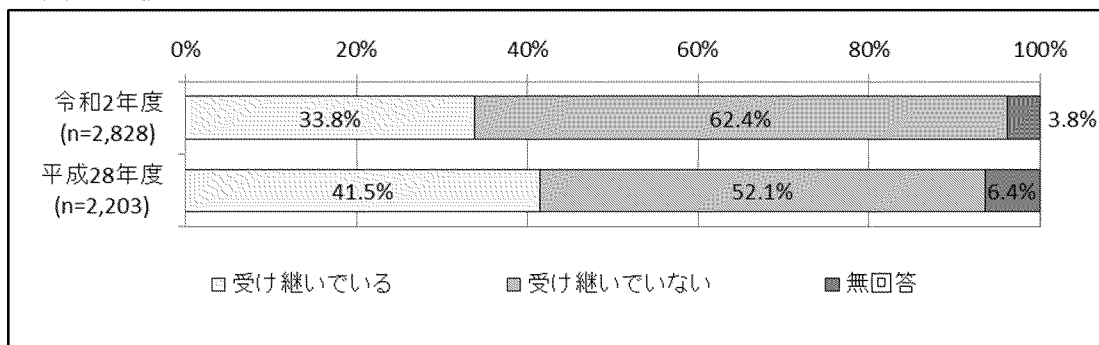
(2) 年代別・地域別



- 性別では、女性の「受け継いでいる」の回答が39.3%と、男性を14.5%上回っている。年齢別では、20歳未満が40.0%、70歳以上が42.1%と比率が高くなっており、その他の年齢では年齢が下がるほど「受け継いでいる」の比率が低くなっている。

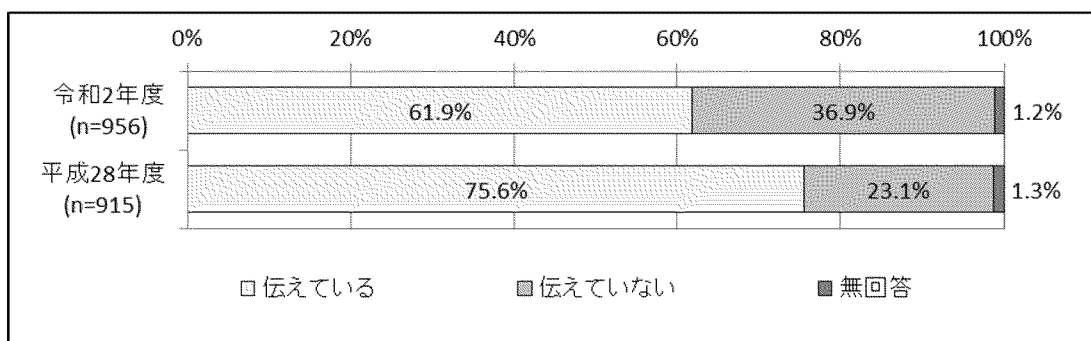
1 1 継承された地域、家庭の食文化の伝承

(1) 伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人の割合



- ・ 「受け継いでいない」が62.4%で、「受け継いでいる」の33.8%を上回っている。「受け継いでいる」は平成28年度と比べ7.7ポイント減少している。

(2) 受け継いだ伝統的な料理や作法等を地域や次世代に対し伝えている人の割合



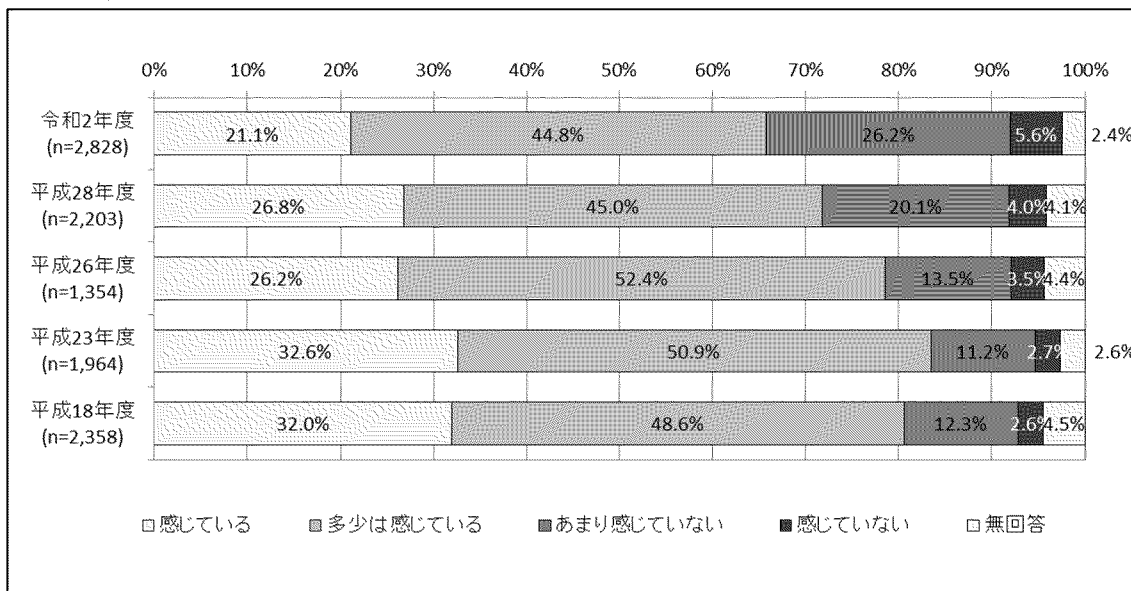
- ・ 「伝えている」が61.9%で、「伝えていない」の36.9%を上回っている。「伝えている」は平成28年度と比べ、13.7ポイント減少している。

※ 伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人が次世代に対し伝えている割合 (令和2年度) 20.9%

区分	回答数	比率	区分	回答数	比率	全体比率
受け継いでいる	956	33.8%	伝えている	592	61.9%	20.9%
			伝えていない	353	36.9%	12.5%
			無回答	11	1.2%	0.4%
受け継いでいない	1,764	62.4%				62.4%
無回答	108	3.8%				3.8%
計	2,828	100.0%	—	956	100.0%	100.0%

基本施策8 食品の安全性の確保

1.2 食品の安全性に不安を感じている人の割合

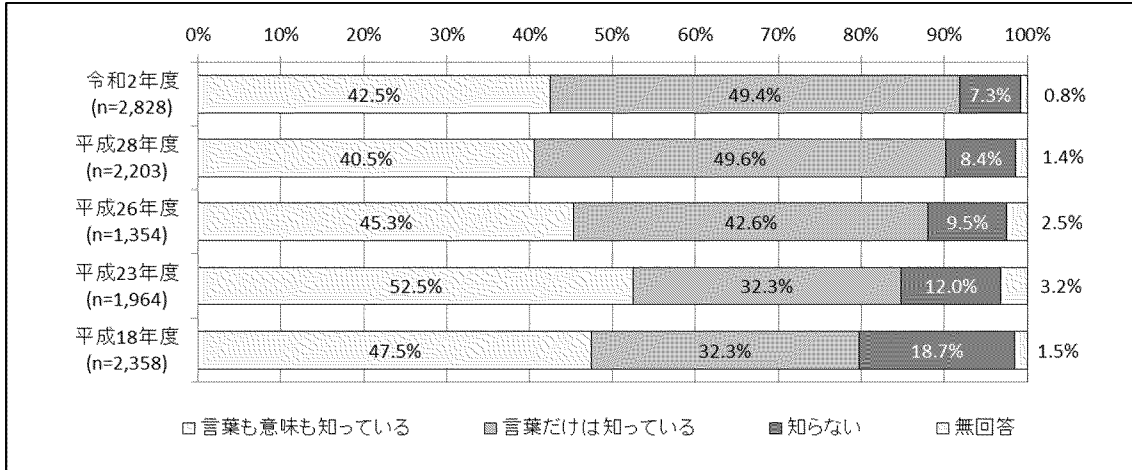


- ・ 「感じている」（「感じている」と「多少は感じている」の合計）は65.9%であり、「感じていない」（「感じていない」と「あまり感じていない」の合計）の31.8%を上回っているが、平成23年度以降減少している。

【基本目標以外の指標】

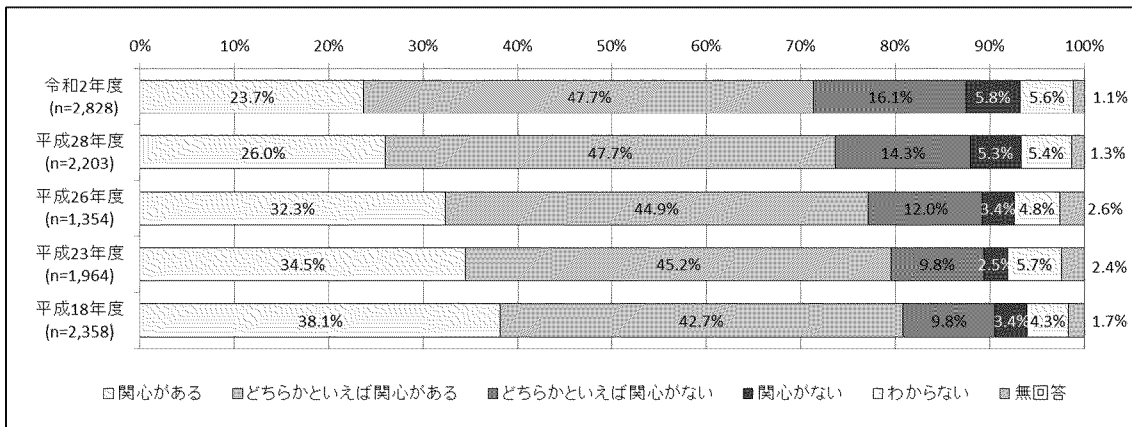
1.3 「食育」への関心や取り組み

(1) 「食育」という言葉を知っている人の割合



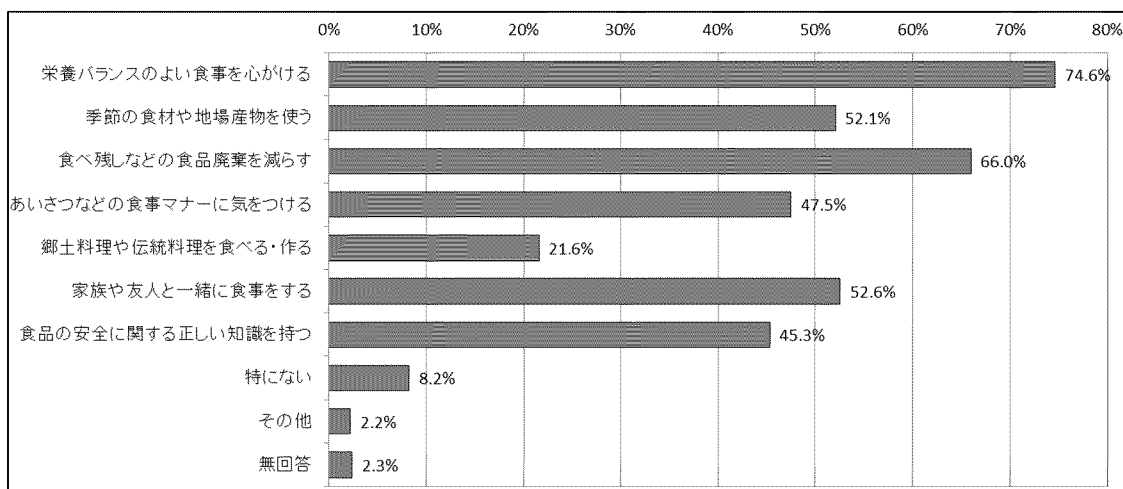
- ・ 「知っている」(「言葉も意味も知っている」と「言葉だけは知っている」の合計) は91.8%であり、平成18年度以降増加している

(2) 「食育」に関心がある人の割合



- ・ 「関心がある」(「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」の合計) は71.4%であり、平成18年度以降減少している

(3) ふだん「食育」に取り組んでいること



- ・ 「栄養バランスのよい食事を心がける」が74.6%と最も高い比率を示し、「食べ残しなどの食品廃棄を減らす」の66.0%、「家族や友人と一緒に食事をする」の52.6%、「季節の食材や地場産物を使う」の52.1%、「あいさつなどの食事マナーに気をつける」の47.5%、「食品の安全に関する正しい知識を持つ」の45.3%が続いている。

食育に関する意識調査のまとめ

「令和 2 年度宇都宮市食育に関する意識調査」から、「第 3 次宇都宮市食育推進計画」の施策指標ごとに数値を比較したもの

【基本目標 1】《身体のことを考え、食事のバランスなどを心がけて食べます》

基本施策 1 子どもの頃からの健全な食生活の推進

生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むためには、子どもの頃から基本的な食習慣を身につけ、継続していくことが重要であることから、健全な食生活の実践に向けて、家庭、学校、保育所、高校や大学等との連携した食育を推進します。

【施策指標】

施策指標	第 3 次計画 策定時(H28)	意識調査 結果(R2)	目標値 (R3)
朝ごはんを毎日食べている子ども(小学 6年生)の割合	95.5%	89.4%	100.0%
朝ごはんを毎日食べている若い世代(2 0歳代・30歳代)の割合	69.8%	63.9%	85.0% 以上

- ・ 朝ごはんを毎日食べている小学 6 年生の割合は 89.4% であり、平成 28 年度と比べると 6.1 ポイント減少している。
- ・ 朝ごはんを毎日食べている 20 歳代・30 歳代の割合は 63.9% であり、平成 28 年度と比べると 5.9 ポイント減少している。

【評価】

- ・ 朝ごはんを毎日食べている小学 6 年生の割合は、平成 28 年度と比べると減少しており、また、毎日食べている若い世代の割合についても、平成 28 年度よりも減少していることから、朝食を毎日食べることの重要性について、更なる啓発に向けた取組が求められている。

【課題】

- ・ 朝食を毎日食べることは、栄養バランスに配慮した食生活や、基本的な生活習慣を身につける観点から非常に重要であるが、20 歳代、30 歳代の若者層が毎日、朝食を食べる割合が低い数値となっており、子どもの頃から、朝食をきちんと食べるなど、規則正しい食生活を身に付けることが重要であることから、朝食を食べることの重要性をわかりやすく啓発するなど、更なる取組が必要である。

基本施策2 生活習慣病の予防や改善に向けた食育の推進

食生活の乱れや栄養バランスの偏りなどに起因する肥満などの生活習慣病につながる課題がみられることから、望ましい食生活を実践できるよう、日常的な食生活等の改善に向けた食育を推進します。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時 (H28)	意識調査 結果 (R2)	目標値 (R3)
主食・主菜・副菜を1日2回以上そろえて食べる人(20歳代・30歳代)の割合	44.2%	42.2%	55.0% 以上
主食・主菜・副菜を1日2回以上そろえて食べる人(40歳代・50歳代)の割合	49.8%	48.0%	70.0% 以上
メタボリックシンドロームなどの生活習慣病の予防や改善のための行動を実践する人(40歳代・50歳代)の割合	25.2%	30.7%	50.0% 以上

- ・ 主食・主菜・副菜を1日2回以上そろえて食べる20歳代・30歳代の割合は42.2%であり、平成28年度と比べると2ポイント減少している。
- ・ 主食・主菜・副菜を1日2回以上そろえて食べる40歳代・50歳代の割合は48.0%であり、平成28年度と比べると1.8ポイント減少している。
- ・ メタボリックシンドロームなどの生活習慣病の予防や改善のために、適切な食事、定期的な運動、週に複数回の体重測定などの取組を実践する40歳代・50歳代の割合は30.7%であり、平成28年度と比べると5.5ポイント増加している。

【評価】

- ・ 主食・主菜・副菜を1日2回以上そろえて食べる20歳代から50歳代の人の割合は、平成28年度と比較するとほぼ現状維持となったが、目標の達成はできていないため、望ましい食生活の実践について、更なる啓発に向けた取組が求められている。
- ・ メタボリックシンドロームなどの生活習慣病の予防や改善のための取組を実践する40・50歳代の割合は、平成28年度と比べるとやや増加しており、取組は一定の成果があったが、目標の達成はできていないため、生活習慣病の予防等の実践の重要性について、更なる啓発に向けた取組が求められている。

【課題】

- ・ 栄養バランスの偏りは、肥満などの生活習慣病につながることから、「主食・主菜・副菜を組み合わせさせた食事」を食事の目安とした、栄養バランスに配慮した食生活の推進が必要である。
- ・ 生活習慣病の予防や改善のためには、日常から望ましい食生活を意識し、実践することが重要であり、普段から生活習慣病の予防や改善の方法等について理解を促進する取組が必要である。

基本施策3 歯と口の健康づくりの推進

健全で豊かな食生活を送るためには、よく噛んでおいしく食べるための口腔機能の発達や維持が重要であることから、歯と口腔の健康づくりを推進します。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時 (H28)	意識調査 結果 (R2)	目標値 (R3)
ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合	31.1%	41.0%	55.0% 以上

- ・ ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合は41.0%であり、平成28年度と比べると9.9ポイント増加している。

【評価】

- ・ ゆっくりとよく噛んで食べる人の割合は、平成28年度と比べると増加しており、取組は一定の成果があったが、目標の達成はできていないため、ゆっくりとよく噛んで食べることの重要性について、更なる啓発に向けた取組が求められている。

【課題】

- ・ ゆっくりとよく噛んで食べることは、唾液の分泌を促し歯科疾患の予防につながる。さらに、早食いを防ぐことが肥満の防止につながることから、生活習慣病の予防のためにも、ゆっくりとよく噛んで食べる習慣をつけることの重要性を周知・啓発することが必要である。

【基本目標 2】《家庭だけでなく地域や職場で食を支え、楽しく食べます》

基本施策 4 家庭における食育の推進

家庭は食にかかわる最も中心的な場であり、家族との食事やふれあいを通して、望ましい食習慣の定着を図ることが重要であることから、健全な食生活を実現するために、家庭における食育を推進します。

【施策指標】

施策指標	第 3 次計画 策定時 (H28)	意識調査 結果 (R2)	目標値 (R3)
朝食または夕食を家族と一緒に食べる 1 週間あたりの日数	週 5.8 日	週 6.0 日	週 6.0 日 以上

※ 1 週間あたりの日数については、「毎日食べる」を週 7 日、「週に 5～6 日程度」を 5.5 日、「週に 3～4 日程度」を 3.5 日、「週に 1～2 日程度」を 1.5 日、「一緒に食べることはない」を 0 日として、当該人数を掛け、合計したものを全体数で割って算出

- ・ 朝食または夕食を家族と一緒に食べる 1 週間あたりの日数は 6.0 日であり、平成 28 年と比較すると 0.2 日増加している。

【評価】

- ・ 朝食または夕食を家族と一緒に食べる 1 週間あたりの日数は 6.0 日と、目標を達成することができた。

【課題】

- ・ 世帯構造や暮らしの変化により、暮らしが多様化するなか、家庭は食にかかわる最も中心的な場であり、家族との食事やふれあいを通して、食の楽しさを実感するだけでなく、食や生活に関する基礎の習得の機会にもなることから、引き続き、子どものうちから、家族と一緒に食べる環境を創る取組が必要である。

基本施策5 地域や職場における食育の推進

高齢者の単身世帯や共働き世帯の増加など家族構成やライフスタイルが多様化する中で、個人や家庭の努力のみでは、健全な食生活の実践につなげるのが困難なことから、家庭生活以外での食の機会の提供など地域社会や職場における食育を推進します。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時(H28)	意識調査 結果(R2)	目標値 (R3)
地域や所属コミュニティ（職場等を含む）での食事会の機会があれば、参加したいと思う人の割合	30.6%	23.5%	—
過去1年間に地域や所属コミュニティ（職場等を含む）での食事会に参加した人の割合	63.4%	61.4%	—

- ・ 地域や所属コミュニティでの食事会の機会があれば、参加したいと思う人の割合は23.5%であり、平成28年と比較すると7.1ポイント減少している。
- ・ 過去1年間に地域や所属コミュニティでの食事会に参加した人の割合は、61.4%であり、平成28年と比較すると2ポイント減少している。

【評価】

- ・ 地域や所属コミュニティでの食事への参加の意向や、食事会へ参加した人の割合は、平成28年と比較するとともに減少しているが、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で食事会の開催や参加を控えるなどの動きがあったものと考えられる。

【課題】

- ・ 誰かと一緒に食事をする共食は、健康な食生活につながり、会話やコミュニケーションの増加、食事がおいしく、楽しく感じられるといったメリットがあり、食育において重要である。

そのため、地域や職場におけるコミュニティを通じ、「料理に集中、おしゃべりは控えめ」など、「新たな日常」に対応した、共食を楽しむ環境づくりが必要である。

【基本目標3】《食への関心や感謝の気持ちを持ち、地元でとれたものを無駄なくおいしく食べます》

基本施策6 食の循環や環境への理解の促進

地場農産物や食品の廃棄などに関心をもつとともに、生産から消費までの食の循環を意識し、生産者をはじめとして多くの関係者により、食が支えられていることなどの食に関する理解を促進し、食に対する感謝の心を育みます。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時(H28)	意識調査 結果(R2)	目標値 (R3)
食べ残しや食品の廃棄に関して気をつけている人の割合	92.4%	91.3%	100.0%

- ・ 食べ残しや食品の廃棄に関して気をつけている人の割合は、91.3%であり、平成28年と比較すると1.1ポイント減少している。

【評価】

- ・ 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で外食を控え、家庭で食事をする機会が増えていた中、食べ残しや食品の廃棄に関して気をつけている人の割合は、目標の達成はできなかったが、平成28年と比較するとほぼ現状維持であった。

【課題】

- ・ 食の循環や環境への理解の促進のためには、食に対する感謝の心を育むことが重要であることから、地場農産物や食品の廃棄などに関心を持つとともに、残さず食べるだけでなく、家庭における調理においても、「買いすぎない」、「作りすぎない」ことについても意識してもらうことが必要である。

基本施策7 食文化の継承

日本の食文化を守り伝えるため、子どもの頃から地域や家庭で慣れ親しんだ行事食や季節の料理、家庭の味や習慣などを食事の作法などとともに次世代に継承します。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時 (H28)	意識調査 結果 (R2)	目標値 (R3)
地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人の割合	41.5%	33.8%	—
地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を地域や次世代に伝えている人の割合※	31.4%	20.9%	50.0% 以上

※ 地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人のうち、それらの伝統を地域や次世代（子どもや孫を含む。）に伝えている人の全体に占める割合

- ・ 地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人の割合は33.8%、また、その受け継いだ料理や作法等を地域や次世代に伝えている人の割合は20.9%であり、平成28年と比較すると、受け継いでいる人が7.7ポイント、伝えている人が10.5ポイント減少している。

【評価】

- ・ 地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を受け継いでいる人の割合や、その受け継いだ料理や作法等を地域や次世代に伝えている人の割合は、平成28年と比較すると共に減少しており、目標達成に向け更なる取組が求められている。

【課題】

- ・ 先人によって培われてきた多様な食文化を後世に伝えつつ、時代に応じた優れた食文化や豊かな味覚を育むため、ホームページでの情報発信など「新たな日常」に対応させながら、郷土料理・伝統料理を習う機会への参加を促すなど、興味をもってもらい、知ってもらうための取組が必要である。

基本施策 8 食品の安全性の確保

食品の安全性への不安の解消を図るため、食の安全について正しい知識を持ち、適切に判断し、選択していくことが必要であることから、消費者、食品事業者双方の食の安全に関する知識や理解の促進を図ります。

【施策指標】

施策指標	第3次計画 策定時 (H28)	意識調査 結果 (R2)	目標値 (R3)
食品の安全性に不安を感じている人の割合	71.8%	65.9%	50.0% 以下

- ・ 食品の安全性に不安を感じている人の割合は65.9%であり、平成28年度と比べると5.9ポイント減少している。

【評価】

- ・ 食品の安全性については、平成28年度と比べると不安を感じている人の割合が減少していることから、取組について一定の効果はあったが、目標を達成するには至っていないため、更なる啓発に向けた取組が求められている。

【課題】

- ・ 安心・安全な食環境づくりの促進に当たっては、食品の選び方や適切な調理・保管の方法等について基礎的な知識を持ち、その知識を踏まえて行動していくことが重要であることから、引き続き、食品の安全性に関して情報提供を行い、基礎的な知識を取得し、その知識を踏まえて自ら判断できる人を増やす取組が必要である。

【基本目標以外の指標】

指 標	第3次計画 策定時(H28)	意識調査 結果(R2)	目標値 (R3)
「食育」という言葉を知っている人の割合	90.1%	91.9%	—
「食育」に関心がある人の割合	73.7%	71.4%	—

- ・ 「知っている」（「言葉も意味も知っている」と「言葉だけは知っている」の合計）は91.9%であり、平成28年度と比べると1.8ポイント増加している。
- ・ 「関心がある」（「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」の合計）は71.4%であり、平成28年度と比べると2.3ポイント減少している。

【評価】

- ・ 「食育」という言葉を知っている人の割合は91.9%で、「食育」に関心がある人の割合は71.4%であり、平成28年度と比べるとほぼ現状維持であった。

【課題】

- ・ 「食育」の推進にあたっては、市民一人一人が「食育」の意義や重要性を理解するとともに、自ら主体的に「食育」の実践に取り組むことが重要であることから、「食育」に関する事業を通じて、「食」に関心を持ち、「食育」を意識して行動できる人を増やすことに努めていく必要がある。

【課題のまとめ】

- 20歳代、30歳代は朝食を毎日食べる人や主食・主菜・副菜をそろえて食べる人の割合が依然低く、よく噛んで食べる人や、栄養バランスの良い食事を心がけている人の割合についても、他の年代では向上しているものの、若年層では低調であることから、規則正しい栄養バランスのとれた食生活の促進などについて、この世代も興味を持てる、食を通じた市民一人ひとりの健康づくりが必要である。
- 地域や所属コミュニティでの食事に参加したい人の割合が減少していることや食品の廃棄に関心を持つ人の割合が伸び悩んでいることから、多様な暮らしの中でも共食の促進や、食品廃棄の抑制につながる取組を充実していく必要がある。
- 食品の安全性に不安を感じている人の割合は減少したものの、依然、公衆衛生上重要であることや、郷土料理や伝統料理を継承する人の割合の減少が続いていることから、食品の安全性に関して、基礎的な知識に基づき自ら判断する人を増やす取組や、郷土料理・伝統料理について、興味をもってもらうための取組を推進する必要がある。